政 治 研 究 結 果 報 告 書

―政治研究助成―

西暦２０２４年（令和６年）２月２９日

一般財団法人　櫻　田　會
理事長　　増田　勝彦　殿

研 究 者　日本大学法学部教授
浅野　一弘

第３９回（令和２年度）櫻田會政治研究助成による研究を下記のとおり実施しましたので、その結果について報告します。
※印の記入項目に関する貴會ホームページへの掲載についても同意いたします。

記

※研究の名称（英語も記入）　Research Theme

短命内閣に関する研究
Research on Short-lived Cabinets

※英文抄録（研究目的、経過、成果 250 words **以内）** Abstract (Purpose, Process, Significance)

Traditionally, there has been a lot of research on long-lived regimes, but there has been very little research on short-lived regimes. Therefore, in order to investigate the causes of the short-lived period, this study focuses on the Tsutomu Hata administration, which ended with a tenure of only 64 days.

There is a very close relationship between the maintenance of the regime and its leadership. The personality of the prime minister has a great influence on the creation of such leadership. In this study, we decided to focus on Hata's life. Although Hata's father was a member of the Diet, Hata himself did not originally aspire to be a politician. After failing the high school entrance examination, he went on to the attached high school and went on to university. And when he got a job, he failed the newspaper company exam he was aiming for at the beginning, so he ended up using his parents' connections to join a bus company. As you can see from this, it is difficult to say that Hata has the experience of fighting and winning. As a result, he was not able to exert much power in the political world, where the obsession with power is emphasized.

Partly because of Hata's personality, even after he became prime minister, he did not take the lead in resolving the situation. Finally, he was forced to announce his resignation. Thus, it became clear that the short-lived Hata Cabinet had a lot to do with Hata's own personality.

※研究の目的・研究方法・意義（和文 600 字以内）

従来の学界の傾向をみても、長期政権に着目し、その特色などを描きだす研究は数多く蓄積されてきている。現に、日本では、在職期間 2798 日の佐藤栄作政権に関する書籍が数多く刊

行されてきた。それらの研究に共通しているのは、通算在職日数と内閣総理大臣のリーダーシップとの関連に留意するという視点である。

だが、他方で、在職日数の短い政権についての研究は皆無に等しいといっても過言ではなかろう。その好例として、在職日数 54 日の東久邇宮稔彦政権、64 日の羽田孜政権をあげることができる。もっとも、在職期間わずか 65 日の石橋湛山については、石橋が多くの著作をのこしていることもあって、人物そのものに焦点をあてた研究が多くのこされている。

そこで、本研究では、なぜ短命内閣に終わってしまったのか、当時の政治状況や首相のリーダーシップ、パーソナリティーなどに着目することで、その原因の解明をめざす。こうした分析をつうじて、どのように対応していれば、延命することが可能であったのかについても明らかとなろう。このように、本研究の意義は、戦後日本政治史における短命政権の位置づけをおこなうところにある。

なお、研究方法としては、長期政権に関する文献や数少ない短命政権に関する資料を収集し、それらを精読することにくわえ、地方紙の分析にも着目する。同時にまた、関係者へのインタビュー調査も実施し、短命政権の特質を明らかにする。

※研究経過と結果の概要　（以下の欄に 35 行以内（1500 字程度）にまとめる）

先述したように、通算在職日数がもっとも短かったのは、東久邇宮稔彦政権である。本来であれば、同政権に注目するのが、本研究の趣旨にもっとも合致しているのかもしれない。しかしながら、関係者へのインタビュー調査をおこなうことを念頭においていることもあり、今回は、二番目に短命である羽田孜内閣をクローズアップし、同政権の特徴を探ることとした。

短命内閣に終わる理由の１つに、首相のパーソナリティーが大きく関係していることもあり、羽田自身の生涯を検討することで、羽田自身の人格がどのように形成されていったのか、そして、その性格が首相としてのリーダーシップを発揮するうえで、どれほどプラスになったのか、あるいはまた、マイナスにしかならなかったのかを解明しようとした。

そこで、明らかとなったのは、羽田の父親が国会議員であったにもかかわらず、羽田自身、いわゆる政治家となるための“帝王学”を受けることなく、育っていったという事実である。羽田とおなじ年に初当選した小沢一郎などは、自分が親のあとをつぐことをつよく意識していたというが、羽田の著作をみるかぎり、そうした傾向は感じとれない。関係者へのインタビューにおいても、この事実は確認されている。それゆえ、羽田は偶然首相の座につくことができた幸運な人物といういい方もできなくはない。さらに、厳しいいい方をすれば、首相になろうとの意識がひくく、そのための準備もできていなかったからこそ、羽田内閣はわずか 64 日で終わったのである。このように権力欲がうすいとされる羽田ではあるが、政治家になってからは、国会改革をめざし、衆議院議長のポストには関心を示すことがたびたびあったそうだ。

さて、学生時代の羽田は、勉学のほうは不得意であったようで、地元の公立高校の受験に失

敗し、東京の私立高校に入学する。その後、高校から、エスカレーター式で、大学へと進学する。このことも、闘う気迫があまり感じられない羽田の性格形成と関係があろう。卒業後、ジャーナリストの道をこころざすものの、入社試験に不合格ととなり、親のコネで、バス会社に就職する。ここからも、他人を押しのけてでも、なにかを勝ちとるというつよい精神力は感じられない。こうした点こそが、政治的難局でのねばりづよさを示せなかった一因といえよう。

ただ、権力欲のなさにくわえ、政界のキーパーソンである小沢と初当選の同期であり、おなじ田中派に属していたこともあって、首相のポストへとかつぎだされることとなるのだ。小沢にとってみれば、ある種、操りやすい“人形”であったともいえる。しかも、羽田の場合、金丸信のことばを借りれば、ただただ、念仏のように、「政治改革、政治改革」と唱えていたため、きわめてクリーンな印象を世間にあたえることができたのだ。まさに、小沢にとって、首相の座にすえるにあたって、羽田ほど好都合な人物はいなかったということになる。こうした経緯からもわかるように、羽田自身、権力への執着心が弱いことも手伝い、当時の社会党の離反にあたっても、みずから積極的に事態の収拾にのりだすこともなく、終始、他人まかせでしかなかった。そのため、結局、羽田内閣は 64 日でピリオドを打つのである。

政権を手放したあとも、顕著な功績をのこすことなく、死をむかえたということ自体、羽田の権力への執着のうすさを示しているといってもよかろう。そのためか、羽田政権に関する研究は皆無に等しい。ここからも、本研究は、かなりの独創性を有しているといえるはずである。

※研究成果の発表・著書、論文、学会報告等（あるいは発表の計画や形式等）

今回の研究をつうじて得られた成果については、学内の紀要への投稿を考えていると同時に、外部の学会誌への投稿も視野に入れている。

また、学会報告に関しては、日本法政学会や日本臨床政治学会などの学術登録団体の場において、実施する予定である。

〔注〕 文責は貴研究グループに負っていただきます。個人情報等には十分ご留意ください。